

ガ
ー
リ
ツ
シ
ユ

南国の樹木が葉を揺らし、色鮮やかな花を咲かせている。

アトリウムの外は真っ白な雪景色だというのに、今、亜衣がいるここは夏の浜辺のように暖かい。窓の向こうに広がる雪原に太陽の光が反射し、きらきらと輝いていることに、外は冬なのだと思います。出すくらいである。

亜衣はリゾート気分浸りに、メロンソーダをひと口含んだ。

「贅沢だなあ。でも、大人の世界って感じ」

広々としたプールサイドにはデッキチェアが設えられ、水着姿の男女が寛いでいる。亜衣のように、カフェ・バーのテールでドリンクサービスを楽しむ者もいる。

ホテルの宿泊者のみに開放された屋内プールには、心地よい静けさと、ゆったりとしたムードが漂っていた。スポーツクラブのようにながつつり泳ぐ人もおらず、運動オンチの亜衣には、とてもありがたい環境といえる。

東京から上越新幹線で八十分。雪の高原に優雅な佇まいを見せる『フロル・ネーヴェ』は、高級リゾートホテルだ。越後の清々しい自然の中、温泉をはじめとした種々のリラクゼーションを楽しむ

むことができる。

年末年始をリゾートホテルで過ごすそうと亜衣を誘ったのは、二人の先輩社員、早川と水木だ。彼女達はプールに併設されたフィットネスルームでピラティス体験中だが、運動が苦手なここ最近まともに身体を動かしていない亜衣は、筋肉痛を恐れて遠慮した。

亜衣が、都内に本社ビルを構える飲料メーカー『トリオドリンク』に入社したのは、今年の春。財務部経理課に事務員として配属され、デスクが隣の早川と水木が教育係になった。教育といっても厳しいのは仕事のみで、明るく気さくな先輩達はプライベートでは亜衣を可愛がってくれる。三人の中で一番年長の早川は二十七歳。おっとりしたお嬢様という風情だが、仕事は完璧で責任感も強い。しっかり者で、プライベートでも頼りになる存在だ。

水木は二十六歳。性格は明るく行動的で、はつきりとものを言う。多少強引なところもあるが、職場のムードメーカーである。

いい先輩に恵まれて、自分は本当にラッキーだと思う。ただ、二十三歳の社会人としては、この先輩達からの扱いに、少し不満があった。

『亜衣って、うんと年下の妹みたい』

『目が離せないっていうか、思わずお世話しちゃう』

などと言われ、よしよしと頭を撫でられるのだ。小さな子供のよう可愛がられるのは、ちょっと心外だ。

(二人とも、私と同じ二十代なのに)

亜衣は入社してからこれまで、一生懸命に仕事して、事務員としてのスキルを磨いてきた。入社したての頃に比べ、かなり成長したつもりだが……

『少なくとも、お給料分は役立ってます……よね?』

そう、確かめたことがある。先輩達は顔きながら、やっぱり子供扱いして頭を撫でるのだ。どうしてそんな扱いをするのかと、亜衣は口を尖らせてしまった。

『ほら、そういうところ。それに、あんたって童顔で、小柄で、少女趣味じゃない。ドジっ子要素も加わって、少女漫画の主人公みたいでしょ』

水木の冗談口調に、おっとりタイプの早川も噴き出す。

『そうそう、しかもかなり純情なタイプ?』

楽しそうに笑う二人に悪気はない。仕事面での成長ぶりはちゃんと認めてくれるし、可愛がってくれるのも事実だ。……でもやっぱり、納得できない。

(だって、童顔は仕方ないもの。小柄なもの。それに……)

亜衣は自分の水着姿を見下ろす。赤の布地に白のドット柄。縁かまにフリルをあしらったキュートなデザインに一目惚れして買った、初めてのビキニだ。

あらためて周囲を見回すと、女性客の身に着ける水着は適度にセクシーで、それでいて品がある。それに比べて亜衣の水着姿はいかにも幼い。しかも今日の髪型は、結び目の高いポニーテールだ。外国人の客など、子供と勘違いするかもしれない。

(セツトになったキャミワンピも着ればよかったかなあ。でも、もっとフリフリなんだよね)

この少女趣味は簡単にやめられそうにない。買い物に行くと、フリルやリボンのついた洋服や下着をつい選んでしまう。甘い少女テイストは、亜衣のアイデンティティーなのだ。

そういった服装の好みに加え、小さな子供みたいに道端でコケたり、そっかしいところがあるので、いつの間にかドジっ子認定されてしまった。普段はいいのだが、何かに気を取られて慌てたり、ぼーっとしているといけない。

運動神経の鈍さも手伝い、とんでもなく派手に転ぶ場合もある。そんな時はかなり痛いし、恥ずかしい。自分的には可愛いでは済まされないのだが、しつかり者の先輩達には微笑ましく映るのだろう。

亜衣はため息をつきそうになるが、ぐっと顔を上げる。

「大丈夫、人間肝心なのは中身だもん。それに、リゾートの大人っぽい世界を、ちゃんと楽しんでもすから」

誰かに言い訳するみたいに呟くと、メロンソーダを飲みきり、空になったグラスをテーブルに置いた。そしてなんとなく立ち上がり、プールサイドを歩き出す。サンダルの底が滑らないように、慎重に、ゆっくりと。

(外見はコドモの私だけど、ちゃんとオトナ扱いしてくれる人が、きっと現れる)

それはもちろん男性である——いわゆる彼氏、いわゆる恋人。亜衣は生まれてこの方まったく経験のない恋愛というものに、ようやく憧れを抱き始めていた。

今まで、恋なんてものは、大好きな少女漫画を読めば満足できると思っていた。ヒロインに自己

投影し、素敵な男子から告白されたり、デートしたり、疑似体験すれば済む話だから。

奥手にも程があると早川や水木に呆れられるが、これは亜衣にとつては自然なこと、なんの不都合もなかったのだ。

女子高から女子大に進学したので、男の子と接する機会は数えるほどだったし、そのまま恋愛に目覚めるきっかけもないまま社会人になった。

(興味がないわけじゃなくて、特に必要としなかったというか。うーん、なんだろ。大幅に遅れた成長期がようやくその時を迎えた、みたいな……でも、その時ってどんな時？ ココロの成長期かな?)

自らを分析して首をひねる亜衣だが、とにかく今は異性という存在を意識し、交流を求めている。他部署との飲み会があれば参加するし、合コンに誘われたら行ってみる。近頃の亜衣は、かつてないほど出会いに積極的だ。

かといって誰でもいいというわけでもない、なかなか上手くいかないのだが。亜衣が理想とするのは、爽やかで優しいスポーツマンタイプ。

それこそ少女漫画に登場するヒーローのように、自分だけを見つけてくれて、理解してくれて、ちゃんとオトナ扱いしてくれる男性。

そんなパーフェクトな彼氏がいたら——

「きゃあっ！」

妄想に気を取られ、足もとが留守になっていた。

ここはデッキチェアが並ぶスペース。向こうずねを思いきりチェアにぶつけ、身体のパランスを崩した。

悲鳴を上げて倒れ込んだのは、仰向けで寝そべっている男性の上。(やってしまった！)

気付いた時には、もう遅い。身体を投げ出した亜衣は、男性に抱えられていた。

「すすす、すみませんっ！」

双方とも水着姿のため、素肌が密着している。慌てて起き上がろうとしたところで、男性に腕を掴まれた。

びっくりしてもう一度悲鳴を上げそうになるが、優しい眼差しに捉えられ、声が止まる。

「大丈夫だよ。落ち着いて」

「は……はい」

何てことだろう。

亜衣は信じられない思いで、その人を見つめる。あまりにも、素敵すぎる人だった。

凛々しい眉に、澄んだ眼差し。爽やかな笑顔は亜衣の理想そのもので、吸い込まれそうな魅力に満ちている。

また、黒髪のショートウルフは亜衣が好む髪型だ。適度に筋肉質な身体も超理想的。

理想の男性像を妄想し、ぼんやり歩いていた。

そんな私に、神様が用意してくれたのだろうか。この出会いを――

「ごめんなさい……私っ……」

「怪我しなかった？」

「はい」

「それは何より」

彼は亜衣のポニーテールをそっと撫でた。思いやりに溢れた仕草にぼーっとなるが、その指が髪の毛の先に届くのを見て、ようやく状況を把握する。

彼のネックレスに、亜衣の髪が絡まっている。慌てて起き上がるのを彼が止めたのは、このためだった。

「わわっ、どうしよう！」

「動かないで。すぐに取れるよ」

「は、はいっ」

彼は亜衣の髪を丁寧に解し始めた。

(お、男の人とこんなに近い……というより、密着するなんて！)

裸の胸板に押し付けた小さな膨らみが恥ずかしい。あり得ないシチュエーションに赤面しながらも身動きが取れず、彼の手もとを見守るのみ。

(あ……眩しい)

彼が着けているのは、天使の片翼をモチーフにしたプラチナネックレスだ。アトリウムを照らす陽射しに、きらきらと輝いている。

優美な細工が施されたアクセサリーに亜衣は目を細めた。

「ネックレス、きれいですね」

「うん？」

彼は少し驚いたようだが、すぐに真面目で、それでいてどこか楽しげな声が返ってきた。

「ありがとう。俺の宝物なんだ」

「たからもの……」

もしかして、女性からのプレゼントだろうか。恋人か、もしくは奥さんとか。

亜衣はもやもやと湧く想像を振り払った。今はそんな状況ではない。迷惑をかけた上に余計な詮索をするなど失礼だ。

それ以上に、このときめきが消えてしまいそうで、イヤだった。

「はい、解放」

彼はネックレスから毛先を解くと、亜衣の身体を起こしてくれた。力強さにドキッとして、亜衣は何も言えず、ひたすら彼の顔を見つめる。

二十代半ばくらい？ 名前はなんていうんだろう。

どこに住んでるの？ 何をしている人なの——

「君の名前は？」

「えっ？」

まさか彼から訊いてくれるとは。亜衣は動揺しつつも、懸命に答えた。

「私、雪原亜衣と言います！」

「うん、亜衣ちゃん。そろそろ下りてくれると、助かるんだけど」

「……はい？」

そこで初めて自分がとんでもない体勢でいることに気付いた。

上半身を起こした彼の上にまたがっている。しかも、真正面からビキニ姿で脚を広げて——

「やだっ、ひゃあ！」

「危ないっ」

慌てて下りようとして、また倒れそうになる。彼に支えられなければ、尻餅をつくところだった。

ようやく亜衣がしっかり立つと、彼は手を離して向き合ってくれた。すらりと背が高い。男らしい均整の取れた身体つきをしている。

「落ち着いて」

「す、すみませつ……あ」

彼に見惚れかけるが、亜衣は周囲からの痛い視線に気が付いて真っ赤になった。さつきから大騒ぎして、落ち着いたリゾート空間をうるさく乱していたのだ。

場違いな振る舞いが恥ずかしく、情けなさでいっぱいになる。

「本当に、ご迷惑をおかけしました。せつかくお休みのところを、私のドジのせいで」

「ドジ？」

あらためて詫びようとする亜衣を、彼は真顔になって見下ろした。その眼差しはやはり優しいけ

れど、今までとは違って何か特別な感情も宿している——ような気がした。

(たぶん、怒ってるわけじゃないよね。でも、どうしてこんなにも熱心に?)

好みど真ん中の男性に注目されているものの、亜衣は嬉しいよりもいたたまれず、逃げ出したい気持ちになった。こんな経験は初めてで、どうすればいいのかも分からない。

「亜衣、お待たせ!」

「ごめんねえ、着替えるのに手間取っちゃって」

固まっている亜衣の背中に、突然声が届いた。ピラティス体験を終え、早川と水木が戻ってきたのだ。彼はハツとした様子になると、亜衣から視線を上げた。

「連れの人?」

「あ、はい。会社の先輩です。東京から、三人で旅行に来てるんです」

「そう、会社の……」

彼は近付いてくる二人を見ながら、フツと息をついた。どういう意味か分からないが、亜衣はとりあえず胸を撫で下ろす。彼は柔らかに微笑んで言った。

「それじゃ、俺はこれで」

「えっ、あの……」

行ってしまう。でも、とつさに呼び止める言葉も、理由も思いつかない。せつかく理想的な男性に出会えたのに、これでおしまい? 名前すら、訊けていない。

行かないで——と、念を送ったのが届いたのかもしれない。背中を向けて歩きかけた彼が立ち止

まった。そして亜衣に振り返り答えたのだ。

「ハルノシヨウヤ」

「?」

目を瞬かせる亜衣に、彼はにこりと微笑む。

「春野翔哉。俺の名前だよ」

スポーツタオルを肩に掛けると、彼は今度こそ立ち去った。あつという間に、まるで春風のよう

うに。

(春野……翔哉さん)

「ちょっと、どうかしたの?」

「何かあった? 変な人だったの?」

早川も心配そうに訊くが、亜衣はぶつぶんと首を横に振る。興奮して、ドキドキしすぎて、まとも

に答えられない。このときめきが何なのか、亜衣は十分に理解していた。

夕食会場のレストランへと歩きながら、プールでの出来事について二人に話した。早川も水木も今はフリーだが、恋愛経験は豊かである。きつと的確な意見が聞けるはずだ。

「名前を教えたってことは、向こうも亜衣に気があるんじゃない。ねえ、早川さん」

「そうねえ。でも、それなら連絡先まで教えてくれたらいいのに。中途半端な気がするわ」

水木のポジティブ思考と早川の冷静な見解。そのどちらにも亜衣は頷く。レストランの手前で、食事を終えたカップルとすれ違った。ジャケットを身につけた男性が、上品なドレスを纏う女性をさり気なくリードしている。

「そうだ、その人もホテルの宿泊客でしょ。レストランで会えるかもよ」
「あつ、ほんとだ。そうですよ」

水木の指摘に、亜衣はぼんと手を叩く。

肝心なことを忘れていた。彼と出会ったのは宿泊客専用プールだ。

「フロルグループの会員かしら。見た感じ若そうだったけど」

『フロル・ネーヴェ』は会員制ホテルで、入会時には審査がある。また、年収によってサービスのランクが変わるといふ。

「エリートサラリーマンか、はたまた若き実業家か。それとも早川さんちみたいに、親が会社経営者とか？」

早川の父は中小企業の社長で、フロルグループの会員とのこと。家族会員である彼女が亜衣と水木を招待し、三人で宿泊することができたのだ。

水木の推測に、亜衣は動揺した。もしそうなら、普通のOLで庶民の亜衣とは縁がない人に思える。万が一縁があったとしても、付き合えそうにない。

(イケメン御曹司かあ。そういえば、紳士で品があつて、王子様みたいだった)

身分差を感じながらも、再会を望んでしまう。レストランで食事する間も、彼が現れるのではと

気が気でなく、目をきよろきよろさせていた。

しかし、コース料理がデザートに差しかかっても、彼は現れなかった。

「あつ、このレストラン、どっかで見たことあると思つたらドラマに出てきたよね。ほら、木曜日にやってる、『ソルシエール』！」

アップルパイを食べようとした時、水木が大きな声を上げた。

ここはピアノ曲が静かに流れる優雅なレストランだ。隣席の客が少しがめるような目で見てきたため、早川が唇に指を立て「静かに」とたしなめた。

「ごめん、ごめん。ドラマの主人公がね、このパイを美味しそうに食べてたのよ」

水木はクリームたっぷりのアップルパイを指差した。

「『ソルシエール』って、グラビア出身の女優さんが主演のエッチなドラマですよ。才色兼備のヒロインが色気で男の人を騙して、いろんな会社を乗っ取っていくような」

そのドラマの原作は女性向けの漫画だ。漫画はかなりの人気で、その実写化であるドラマ『ソルシエール』は、放映前から話題を集めていた。そのため亜衣も初回をチラ見したのだが、あまりにもエロすぎて即テレビを消した。

「あのね、亜衣。企業の合併や買収は乗っ取りじゃなくて戦略。ヒロインの麻耶は悪徳企業をのさばらせないよう戦略を練る、M & Aのスペシャリストなのよ。で、女の魅力はそのための武器。敵方の男性を虜にして味方につけるわけ」

結局、男性を籠絡するのだから同じことでは？ と亜衣は思うが、黙ってパイを咀嚼する。実

ぼっちも感じなかったし」

それに、今思い至ったことがある。春野翔也は、亜衣が大好きだった『純情ポニーテール』のヒーローに似ていた。爽やかなスポーツ少年のような彼だから、強く惹かれたのだ。

「あの人はエロくないです。エッチなこともしません！」

先輩二人はもう一度顔を見合わせると、今度は笑い出した。

「なるほど、『月刊少女ドリーム』にはハードルが高いかもね……あはは」

亜衣は反論もできず、アップルパイの最後の一切れを黙って呑み込む。いたたまれずに窓を見やると、夜の庭に雪が舞っていた。

食事を終えた三人はレストランを出て、連れ立って廊下を歩いた。そこで、亜衣の目は、一面ガラス張りの窓から見える中庭に釘づけとなる。

「うわあ、すごーい降ってますよ。かまくらとか雪だるまとか作れそう。先輩、外に出てみませんか！」

思わず、子供のようにはしゃいでしまう。

亜衣は静岡県の温暖な地域で生まれ育った。そこはめったに雪が降らない土地だったので、雪国の珍しい情景は感動ものだ。

「やだよ、寒いじゃない。それより早く温泉に入りたい」

「露天風呂に浸かりながら雪見というのも素敵よ、亜衣」

早川の家も魅惑的だが、亜衣は降りしきる雪の中を歩いてみたいと思った。きよるきよると周囲を見回し、廊下から庭に出られるドアを見つめる。

「先輩、先に部屋に戻ってください。私、ちょっとだけ歩いてみます」

亜衣が笑顔で告げると、二人が仕方ないなあと苦笑する。

「外は寒いからほどほどにね」

「風邪引かないでよ」

しっかりと頷くと、亜衣はわくわくしながらドアを開いた。外は風があり、ひんやりとした空気が頬に触れる。ニットのワンピースにタイツという薄着だが、少しの時間なら大丈夫だろう。

庇の下に客用の傘が置いてある。亜衣はそれを借りて、スキップするような足取りで庭に出た。

洋風に造られた庭は広々としていて、外灯にぼんやりと浮かぶ景色は幻想的だ。花壇の間を小道が縫い、裏の林へと続いている。雪かきされているので、パンプスでも歩きやすい。

「うわあ、すごい」

雪がますます降ってきて、亜衣は背中を仰け反らせて空を見上げた。

（まるで、真っ白な羽毛が舞い飛ぶよう。鳥……ううん、これは天使の羽根だ）

ふと、先ほどの爽やかな男性——春野翔哉を思った。彼が身に着けていたプラチナネックレスは、天使の片翼をモチーフにしたもの。アトリウムを照射しにきらきらと輝いて、とてもきれいだった。

「また、会いたいなあ」

亜衣は夢見るように眩くと、小道に沿ってさらに進んだ。庭の端まで来ると、杭に結ばれたロープがぐるりと張られ、立ち入り禁止の札がぶら下がっているのが見えた。奥を覗くと暗い木立がある。

ホテルの建物から離れた林は静かで、人の気配がない。ひっそりとして寂しい雰囲気には亜衣は戻り込んだ。

「そろそろ戻ろうかな……ひゃっ」

急に吹いてきた風に煽られ、亜衣は傘の柄を手放してしまった。

「あー、もう。よりによって」

傘が飛ばされたのはロープの向こう側。だが、それほど遠くない場所で留まっている。亜衣は少し迷ってから、腰の高さに張られたロープを潜り、立ち入り禁止区域に入った。

外灯の灯りも届かない真つ暗な林。どこかからせせらぎの音や、雪が葉から落ちる音が聞こえて、ここは山なのだと感じる。足もとすらよく見えない状況は心細くて、亜衣はさっさと傘を拾おうとした。

「あっ、ちよつと待っ……」

またしても風が吹いて、傘を舞い上がらせた。反射的に手を伸ばして柄を捕らえたが、パンプスの底がつるりと滑る。

「へっっ？」

慌ててもう片方の足で踏ん張ろうとしたが、どういうわけか地面がない。

嘘――

バランスを失い、片側に身体が傾く。『落ちる！』という予感が全身を襲った。

「きゃああっ！」

悲鳴を上げたのは、背後から誰かに腰を抱えられ、落下を免れてからだだった。足もとで、雪の塊がばらばらと落ちていく。それらが闇に消えていくのを、亜衣は愕然として見送った。

積もった雪が地面からせり出し、崖を隠していたのだ。暗くてそれが分からず、亜衣はその雪を踏み抜いてしまっていた。

「ひええ」

急ががくと震え出した身体を、力強い腕が引き上げ、地面に戻してくれた。

「ほら、しっかり」

「えっ？」

我に戻った亜衣は、その声に聞き覚えのあることに気付く。まさかと思いながら、後ろから抱っこされたまま上半身を振じって、その人の顔を確かめた。

「春野……翔哉さん」

「ふう、危なかつたな」

爽やかな笑顔にぽうつと見惚れかけるが、彼の額に汗が浮かぶのを見つけ、慌てて立ち上がる。惚けている場合ではない。

「ご、ごめんなさい。私、またしてもご迷惑を……ってどうか、どうしてあなたが、ここに？」

「説明はこれからするから。まずはこっちに来て」

翔哉は亜衣の手を取り、慎重な様子で歩き出す。ホテルの灯りが届く庭に戻ると、彼はあらためて亜衣の全身を眺め回し無事を確認した。

「怪我はない？」

「は、はい」

彼は安堵の表情になると、ジャケットを脱いで肩に掛けてくれた。まるごと包み込んでくれる大きさと温かさに、亜衣は心からホッと、同時にドキドキしてくる。

「廊下の窓越しに君を見かけたんだ。楽しそうにはしゃいであるように見えたけど、なんだか危なっかしい感じがして、俺も庭に出て後を追ったら、案の定」

そう言いながら、翔哉は亜衣から傘を取り上げ、差しかけてくれた。

「本当にごめんなさい。風が吹いて、傘が飛んでいつてしまつて」

「うん、まさか拾いに行くとは思わなかつたな。あんな真つ暗な場所、しかも立ち入り禁止区域に」

亜衣は林を振り返り、それがいかに無謀むぼな行動だつたかと反省する。

あの崖をまともに転がり落ちたら怪我をするところだつた。いや、下手をすれば命にかかわつていたかもしれない。なにせ、この雪と寒さだ。彼が来てくれなかつたら、今頃どうなつていたか。

暗闇に消えていく雪の塊かたまりを思い出し、あらためてぞつとした。

「律儀なんだね」

「えっ？」

「借り物の傘だから、きちんと返そうとしたんだろ？」

思わぬ言葉に、とんでもないと手を振つた。

「いえ、そんな。ただ私は何も考えずに追いかけただけで、その、律儀なんかじゃ……」

しどろもどろになる亜衣を見ても翔哉は笑わず、優しく髪を撫でてくれる。

一度ならず二度までもドジを踏み、彼に迷惑をかけ、そして助けてもらった。それなのに、彼は亜衣を責めることはない。

「春野さん」

「翔哉でいいよ。昼間と髪型が違うね」

「え、あ」

プールではポニーテールだったが、今はハーフアップにして髪を肩に垂らしてある。こくりと頷くと、彼は微笑んだ。

「どっちも似合ってる。可愛いよ」

心臓に悪い、素敵すぎる笑顔！ 亜衣の体温が一気に上がり、全身真つ赤になった。

（こんな時なのに、私つてば……）

ホテルの建物に入ったところで、亜衣はジャケットを返そうとした。しかし翔哉は受け取らず、部屋まで着ていくようにと言う。

「返す時はフロントに預けてくれてもいいし、それが明日の朝……」

亜衣はパッと翔哉を見上げる。

(明日の朝というと、また会えるってこと?)

「……ん?」

「えっ?」

雪が首もとに入ったのか、彼はシャツの襟えりを広げて直す仕草をし、あれっという顔になる。そして服の中を覗き込み、身体のあちこちを確認し始めた。

「どっ、どうかしたんですか?」

彼のひどく焦あせった様子に、亜衣はオロオロした。

「ああ、何でもないよ。それより、君は早く温泉に入って身体を温めた方がいい。俺はちょっと探し物を」

「探し物?」

「いや、とにかく部屋に戻って。お姉さん達が心配してるよ」

冗談口調だが、表情は深刻そうで、眉根を寄せている。亜衣はそれ以上何も言えず、ぺこりとお辞儀をしてからエレベーターホールへと向かった。

「あ、そうだ。明日のこと」

さっきの話の続き——と思い出し、慌てて振り向いたが、もうそこに翔哉はいなかった。

もしかしたら、探し物というのはあのネックレスではないか。

翌朝目を覚ました亜衣は、窓から雪景色を見た途端にパッと閃ひらめいた。雪に包まれた山々も高原も、朝陽に照らされ、プラチナのように光っている。この輝きに似た光を、昨日の昼間、亜衣は彼の胸元に見ていた。

「もしそうなら、私のせいだ」

翔哉は昨夜、亜衣が崖下に落ちるところを助けてくれた。きっとその時、何かのはずみでネックレスのチェーンが切れたのだ。

——俺の宝物なんだ。

「大変、どうしよう!」

慌ててベッドから下りようとして、ずっこけた。亜衣が床に転がり落ちる派手な音に、早川と水木が目を見ます。

「な、何なのよ、亜衣。朝っぱらから」

「翔哉さんの夢でも見たの?」

早川の指摘にギクツとし、情けない顔を二人に向けた。彼女らには、昨夜の出来事を話してある。「まさか、他にも何かやらかして、今思い出したとか?」

女達の勘は鋭い。亜衣は半泣きで、翔哉の探し物について推測したことを話した。

「うわー、それはあり得るね」

「では、翔哉さんは亜衣を部屋に帰した後、崖まで探しに行ったのかしら」

雪がたくさん降る中、危険な立ち入り禁止区域に?

「私、翔哉さんに訊いてくる！」

亜衣が部屋を出ようとするのを、水木が大きな声で止めた。

「ちよーつと待った。彼の部屋番号知ってるの？」

「あ」

そうだった。亜衣は彼のことを何も知らない。

「フロントに聞いてみたら？」

「でも、個人的な情報を教えるかしら」

結局、フロント経由でメッセージを伝えるのが一番確実だろうという話になった。亜衣はふと、翔哉が貸してくれたジャケットを思い出す。フロントに預けてくれてもいいと彼は言った。

（メインロビーで待っていていれば、彼と会えるかもしれない）

直接彼に会って確かめたい。亜衣は急いで着替え始める。

「朝ごはんはどうするの？」

「先に食べちゃってください」

そう答え身支度を整えると、部屋を飛び出した。

メインロビーに着いて時計を見ると、七時半を回ったところだ。チェックアウトするにはまだ早い時間だが、それでもそわそわする。

「雪原亜衣様から春野翔哉様へ。確かにご予約しました」

フロント係にジャケットを渡すと、とりあえずホットとした。翔哉はまだホテルを出ていないよ

うだ。

「お客様」

「えっ、はい」

椅子に座ってロビーで待とうとした亜衣を、フロント係が呼び止めた。

「春野様より、こちらでもご伝言を預かっておりました。ジャケットを届けられたお客様を朝食にお招きしたいと申されています。いかがなさいますか？」

春野翔哉は特別室に泊まっていた。亜衣達の部屋よりグレードが高く、ロケーションもサービスも文字通り特別である。例えば、食事はレストランではなく客室に設けられたダイニングに運ばれる。夕食時のレストランで彼に会わなかったのはそのためだ。

そして彼は、一人で訪れているとのこと。伝言の中に、同伴者はいないので遠慮は無用との補足があった。妻や恋人といった連れがないことに亜衣は希望を膨らませるが、独り者と決まったわけではない。とにかく、彼については分からないことばかりだ。

彼は一体、何者なのだろう。

客室係の男性がインターホンを押すと、「どうぞ」という彼の声が聞こえ、鍵が解除される音が響いた。亜衣はそこで初めてハツとする。

（もしかして、この部屋で翔哉さんと二人きり？ いくら理想のタイプとはいえ、よく知らない男性とホテルの部屋をともにするってどうなの）

入室をためらっていると、客室係が声をかけた。

「春野様から、ドアは開けておくようにと申し付けられております」

「へっ？」

亜衣は大きく安堵するとともに、一時でもためらったことを悔いた。やはり、翔哉は親切な紳士。女性に対してエッチなことを考えるような人ではないのだ。

「そつ、それでは、おじゃまいたします」

亜衣はぎこちない足取りで室内に進んだ。

そこは、部屋の広さも設備も、亜衣の泊まる部屋とは大違いだった。いかにもVIPルームという雰囲気^{けいふ}に気圧^{けいあつ}されて、ますますしくしくしてしまふ。

「こちらでございます」

高級レストランの個室といった部屋に通された。窓の外は朝陽に映える雪景色と澄んだ青空。ダイニングテーブルには二人分の席が用意されている。

(何だか、夢を見てるみたい)

廊下から足音が聞こえ、亜衣はパツと振り向いた。

「明けておめでとう」

爽やかな笑みを浮かべ現れた春野翔哉に、亜衣はたちまち舞い上がった。

セーターにパンツというラフな服装だが、彼の引き締まったスタイルが際立ち、かなりかっこいい。自然に流した髪も、優しい顔立ちも、何もかも素敵すぎる。

「あつ、明けておめでとうございます！」

亜衣は、のぼせそうな頭を一度振ってから、挨拶した。そういえば、今日はお正月だった。翔哉に出会って以来、別世界にいるかのように現実感がない。

そんなことを考えながらそーっと顔を上げると、彼とまともに目が合う。

「亜衣ちゃん、昨夜はどうも。風邪引かなかった？」

「はい、おかげ様で。あのおつ、ありがとうございます」

亜衣があらためて礼を言うと、彼は照れくさそうにした。

「いや、ちょっと心配だったんだ。だから君の顔を見たくてお誘いしたんだけど……連れの皆さんとの都合は大丈夫だったかな？」

「はい、伝えているので大丈夫です」

朝食に呼んでくれたのは、そういうわけなのだ。何て温かな人だろうと、亜衣は感激する。

「とにかく、座つて。お腹がすいただろ」

彼は亜衣にそうながすと、客室係に料理を運ぶよう頼んだ。

彼は昨日と変わらず親切で、亜衣を見つめる眼差しも優しい。だけど、席に着いて彼と向かい合ったところで、ギクツとした。セーターの襟もとに、ネックレスがない。

「あの、翔哉さん」

「ん？」

「あの……ネックレス、昨夜、失くしてしまっただんですね。わ、私のせいで」

亜衣の言葉に、翔哉はふと眉を曇らせる。やっぱり、と亜衣は確信したが……

「いや、君のせいじゃない」

そう、彼はきっぱりと否定した。

「俺の不注意だよ。チェーンの手入れがなってなかった。大切なネックレスなのに」
悲しそうな翔哉の表情が辛くて、亜衣の胸がズキンと音を立てる。

あのネックレスは彼にとつて宝物なのだ。それなのに、彼は紛失の原因を作った亜衣を責めめせず、逆にこちらを氣遣っている。

「私も探します！ 今なら明るいし、きっと見つかりますよ」

「いや、俺も夜明けを待つて探したんだが、どこにもなかった。ホテルの従業員にも手伝わってもらったんだけど、彼が言うには崖下の川に落ちて流されてしまったんじゃないかと」

「そんな……」

もしそうなら、見つかる可能性はほとんど絶望的だ。亜衣には為す術もない。

「本当に、ごめんなさい。私には何もできないけど……せめて弁償させてください！」

「弁償？」

心なしか翔哉の目が光った気がした……が、それは一瞬で掻き消える。

「いや、いいよ。金で買えるものじゃないんだ」

元氣なく呟かれ、亜衣は恥ずかしくなった。お金で解決しようなんて浅はかだ。大切な誰かに贈られた、思い出のアクセサリーかもしれないのに。

でも、それならなおのこと気が済まない。どうにかして罪を償わなければ。

「私のどうしようもないドジのせいで、翔哉さんに何度も迷惑をかけてしまいました。お願いです、お詫びさせてください。何でもしますっ！」

「亜衣ちゃん……」

翔哉が黙り込む。亜衣のしつこさに呆れたのか、それとも何か考えているのか。

じっとしていられず亜衣が椅子から立ち上がりかけたところに、料理を載せたワゴンが入ってきた。

座り直し、料理がテーブルに並べられるのを待つ。

お節を中心とした正月らしいメニューだが、家庭で食べるそれとは違い、とても豪華なものだ。立派なロブスターに、鴨のロース。和洋の料理を取り入れたお重は華やかで、キャビアやからすみなどの高級食材も使われている。あまりにも贅沢な朝食に、亜衣は目を白黒させた。

従業員が下がると、再び二人きりになった。

「あの、翔哉さん」

「——分かった」

彼は立ち上がると入り口に行き、開かれたままだったドアを閉めた。くるとこちらを向くと、真顔になって亜衣に告げる。

「君がそこまで言うなら、償ってもらおうか」

翔哉の雰囲気が変わった。

ドアを閉めたのは、秘密の話をするため？ 亜衣は何だかドキドキしてきた。ときめきとは違う、怖いようなドキドキを感じる。

「本当に、何でもする？」

「も……もちろんです、ハイ」

彼は親切な紳士。変なことは言わないし、絶対にしない。亜衣は自分を励ますように何度も胸の中でそう繰り返した。でも、ちょっとだけ唇が震えていて情けない。

「それなら、仕事を手伝ってもらおうかな」

「……え」

「俺ね、東京で創作系の仕事してるんだけど、人手が足りなくてアシスタントを探してたんだ。亜衣ちゃんみたいな子が来てくれると、すごく助かる」

にっこりと微笑む翔哉を見て、唇の震えが止まった。仕事という言葉聞いて、少し冷静になったのだ。とりあえず、話を進めようと思った。

「東京……はい、私も東京に住んでいます。あ、でも会社の仕事があるので、どうすれば」

「もちろん、仕事帰りとか、休日とか、空いた時間に手伝ってくれば十分だよ。ちなみに俺の仕事場は代々木だけど、亜衣ちゃんの自宅は？」

「吉祥寺です。会社は中野なので、近いですね」

「マジで？」

翔哉の表情がぱあっと明るくなった。輝く笑顔が眩しくて、目が眩みそうだった。

「それじゃ、決まりね。君にはネックレスの価値に見合う分、働いてもらう。そうだな、半年もかからないと思うよ」

「はあ」

ネックレスを失くして落胆した、元氣のない翔哉はどこに行ったのか。今の彼は、どう見ても上嫌だ。もっと気になるのは、彼が真顔になった時に感じた、怖いようなドキドキだ。あれは一体、何だったのだろうか。

（それに、『亜衣ちゃんみたいな』って、どういう意味？）

「とにかく食べよう。はは……正月から縁起がいいな」

ネックレスのお詫びができるのは嬉しい。だけど、どうにも妙な展開に思える。

仕事の内容を聞いても、翔哉は『創作系』と繰り返すだけで、結局彼が何者なのか判然としない。

「細かいことは気にしない。ほら、これも美味しいよ」

「……はい、いただきます」

亜衣は生まれて初めて黒あわびの姿煮というものを食べた。頬張ってはみたものの、なかなか噛み切れなくて困ってしまう。

「おいおい、丸ごとは無理だろ。食べやすいように切れ込みが入ってるのに」

「ふあ、ふぐぐっ」

「慌てないで、水、水」

なんとか噛みちぎったものの、喉につつかえそうになる。焦りまくったが、翔哉のおかげで呑み

下すことができた。

「あ、びつくりしました」

「俺もだよ。あわびを丸ごと口に入れる子なんて、初めてだ。そそっかしいなあ」

呆れた口調ながらも、彼の笑顔は明るい。雪の反射光が部屋を照らし、なおのこと眩しくて亜衣は目を細める。

「ふふ……よろしくね、雪原亜衣さん」

「は、はいっ」

赤くなったり、青くなったりする亜衣を見て、翔哉は幸せそうに笑っていた。

あれから十日後の、東京。

亜衣は今、代々木駅西口にいる。

今日は日曜日ということもあり、街は混雑していた。行人の邪魔にならないよう壁際に立つと、ポケットからスマートフォンを取り出し、翔哉からのメッセージを確認する。

《一月十一日午前十時。代々木駅西口で》

「本当に来るのかなあ」

紛失したネックレスのお詫びに、彼の仕事を手伝うことになった。東京に戻ったら連絡するとの約束どおり、ちゃんとメールが届いたが、未だに現実感がない。

（翔哉さんとの出会いは、雪が見せた幻想なのかも……なんて）

しかし、そんなはずはない。亜衣は彼と二人で食事をし、楽しく会話した。その記憶は鮮明に残っている。

春野翔哉、二十七歳独身。代々木の仕事場兼自宅マンションで一人暮らし。出身は三重県の鳥羽で、家族は両親と、すでに嫁いでいる姉が一人。それから三毛猫が一匹。彼は大学進学と同時に鳥羽の実家を出て、東京で暮らし始めたという。

あの日、翔哉はプライベートなことを気軽に話してくれた。あまりにも気さくな態度にむしろ戸惑うくらいだったが、仕事について話を向けると、

『フロル・ネーヴェには得意先の関係で来るようになった』

とだけで、それ以上の説明はなかった。

（高級リゾートホテルで得意先の接待？ でも、彼は一人でいたし、そんな雰囲気でもなかった）

あれこれ推測したが、結局よく分からない。仕事の内容についても、彼は詳しく教えてくれなかった。早川と水木に話すと、『それは怪しい』と口を揃えた。

『創作系とか言って、業務内容を濁すところが信用ならない。体のいいナンパ？』

『仕事を手伝うよう提案したのに詳しい説明がないだなんて、それは不自然よ。断った方がいいと思うわ。それが難しいなら、なんとかして事前に仕事内容を確認するべきね』

先輩達の忠告に、亜衣は素直に頷いた。だが、結局この時点でまだ何の対応もできていない。

（彼との約束は守りたい。私のせいでネックレスを失くしてしまったのは事実だし、だけど……）

翔哉に惹かれている。好みど真ん中というだけではない。紳士で、とても親切な人だからだ。何度も迷惑をかけたのに、亜衣のドジを責めるどころか、逆に励ましてくれた。大らかな笑顔と優しさに、ドキドキが止まらないのだ。実を言うと最初から、このときめきが何なのか亜衣は理解している。

その上で、一つだけ気になることがあった。

——君がそこまで言うなら、償つくらってもらおうか。

あの時の翔哉は、雰囲気違っていった。ただ、どう違っていったのか、上手く言えない。そして、その時亜衣が感じたときめきとはまったく異質の、怖いようなドキドキについても、自分の中できちんと説明ができずにいる。そのもやもやとした感情が亜衣に盲目的に突き進むのをためらわせている。

「亜衣ちゃん」

ぎゃつと声を上げそうになった。待ち合わせ時刻の五分前、気付いたら翔哉が目の前に立っていた。

「早かったね。待たせたかな」

「いえ、そんなことはありません！」

十日ぶりに目にした彼に、すごく新鮮な気分を覚えた。街中まちなかでの再会だから？ それとも彼に会うのが待ち遠しかったから？ ——多分、後者だ。

「よかった。本当に来てくれたんだ」

翔哉はホツとしたように笑う。眩まはゆい笑顔に、心の中のもやもやが晴れていくようだ。

亜衣は目を細めつつ、都会の街並みを背景に立つ彼をぼうつと眺めた。

ダウンジャケットの下にローゲージニットを着込み、コーデュロイパンツと組み合わせたスポーティカジュアル。襟襟もとからチェックのシャツがチラリと覗き、ブルーとイエローの少年っぽい色合いが彼のイメージにぴったりと合っている。

「翔哉さんって、センスがいいですね」

「そう？」

翔哉は照れた顔で、亜衣を見返してきた。

「亜衣ちゃんも可愛いよ。ふわつとした感じが女の子らしくて、よく似合ってる」

「あ、ありがとうございます」

今日の亜衣は模様編みのセーターにキュロットを合わせ、ふわふわのファー付きポンチョを羽織っている。ヘアスタイルはどうしようか迷ったが、翔哉が似合うと言ってくれたポニーテールに決めた。結び目まわりを三つ編みにした髪で囲み、少しアレンジする。メイクは愛用のピンク系をほんのりのせる程度にした。

翔哉を大人の男性として意識しながらも、ついつい少女テイストに纏まとめてしまった。自分流のファッションとメイクであるが、彼が褒めてくれたので安心する。

「さてと、それじゃ亜衣ちゃん、早速仕事ね」

そう言うと、翔哉は亜衣の手を取った。自然な仕草に、一瞬ぼうつとする。

「えっ？ ちょっと待ってください。これって……」
「うん？」

慌てふためく亜衣だったが、翔哉は平然と対応している。

「これは仕事の一環だよ。取材を兼ねたデート」
「はあ？」

仕事、取材、デート。どういふことか理解できない。

——体のいいナンパ？

水木の言葉が頭をよぎり、亜衣は翔哉の手をふりほどいた。やっぱり、このままじゃいけない。
「どうしたの？」

翔哉は意外そうに、宙ぶらりんになった手と亜衣を見比べている。

「あいつ、翔哉さん。ちゃんと教えてもらえませんか。あなたが何の仕事をしているのか、そして私は何のお手伝いをするのか。創作系の仕事でアシスタントと言われるだけで、私、具体的なこと何ひとつうかがってません」

亜衣は人に強くものを言うのが苦手だ。びくついて、オドオドした態度になってしまった。

「だけど、今はそんなことを言っている場合ではない。曖昧あいまいに流されたり、状況がはっきりしないのは避けなければ。」

「なるほどね」

翔哉は納得したように頷くと、なぜか嬉しそうに微笑む。そして、腕を伸ばして亜衣のポニー

テールを撫でた。初めて会った時のように、困惑する亜衣を思いやる優しい手つきだった。

「翔哉さん？」

「君の、そんなところが実にいい。律義で真面目で、現代っ子らしくなくて」

「……？」

寂然としない様子の亜衣に、翔哉は答えをくれた。

「俺の職業は漫画家」

「ええっ？」

思わず大きな声が出て、亜衣は自分の口をバツふさと塞いだ。冗談かと思ひ翔哉を見つめるが、彼はごく普通の態度でいる。

「ま、漫画家って……マジですか？」

「うん。デビューして七年になるかな。今は雑誌で連載しているし、単行本も何冊か出てるよ」
漫画家は確かに創作系の仕事だが、まさかそんな特殊な職業だとは予想だにできなかった。

亜衣の頭に真っ先に浮かんだのは、『月刊少女ドリーム』である。しかし翔哉は男性であるから、少女漫画家ではないだろう。

「ごめんなさい。私、少年漫画は詳しくなくて。あ、もしかして青年漫画ですか？」
「……」

翔哉は何も言わず、ただ微笑んでいる。

（こんなことなら、弟が買ってた少年漫画もチェックしておけばよかった……でも、春野翔哉って

いう漫画家さんは聞いたことがないし。そもそも、本当にこの人は漫画家なの？)

探るように翔哉を見ると、彼はいきなり亜衣の手を握りしめ、傍に引き寄せた。

「あっ、あわわっ」

もう一度繋がれた手は、逃げ腰の亜衣をぎゅっと掴んで放さない。至近距離から注がれる眼差しは強く、意思まで絡め取られそうになる。

「あのっ、翔哉さん？」

「街を案内がてらデートするつもりだったけど予定変更だな。証拠を見せてやるから、おいで」
「えっ？ ど、どこにですか？」

翔哉は質問に答えず、駅の改札に向かって歩き出す。大いにうろたえる亜衣だが、彼の手から伝わる温もりにドキドキして、逆らうことができなかった。

連れてこられたのは、巨大ビルの足もと。ここはオフィスビルが立ち並ぶ通りだが、その中でも目の前の建物は群を抜いて大きい。

亜衣は仰け反るようになして建物を見上げ、壁面に掲げられた社名を読んだ。

「怜文社……って、もしかして」

「うん、俺が世話になつてる出版社」

亜衣が今でもチェックする『月刊少女ドリーム』は怜文社の雑誌だ。漫画だけではなく、あらゆるジャンルの書籍や雑誌を発行する大手出版社である。

堂々たるビルに、翔哉は臆せず入って行く。亜衣は慌てて追いかけるが、エントランスを抜けたところで足がもつれ、派手にすっこける。大理石の床に膝を突き、肩に掛けていたバッグを思い切り放り出してしまった。

「いたたた……」

「亜衣ちゃん！」

翔哉に支えられ、亜衣は何とか起き上がる。痛さを堪えて顔を上げると、亜衣の悲鳴に驚いたのか、玄関ロビーに居合わせた人々が二人に注目していた。

思わず真っ赤になり、翔哉が拾ってくれたバッグを抱きしめた。

「大丈夫？」

「はい……ごめんなさい」

蚊の鳴くような声になる。立派なビルの豪華なロビーですっころぶなんて恥ずかしすぎる。

「いや、俺こそごめん。つい速足になって……」

「あら、先生じゃないですか」

その時、女性の声が入った。目を向けると、スーツを着た女性がこちらに近付いてくる。ころだった。彼女の視線は翔哉に注がれている。

(先生？)

ネックストラップでIDカードを下げている。怜文社の社員のようだ。

「どうも、葉山さん」

「珍しいですね、こちらに見えるなんて。今日はまたどうして？」

（今、先生って呼んだ。翔哉さんのこと……ということとは）

「ちよっと、彼女を案内したくて」

翔哉の言葉を受け、彼女は亜衣をジッと見つめてきた。

年齢は翔哉と同じか少し上くらいだろうか。背が高く、スタイルのいいメリハリボディに、黒のパンツスーツがよく似合っている。

洗練された都会的美女で、しかも大人の色香が漂う。才色兼備のデキる女という雰囲気、亜衣はなんとなく気圧された。

「あつ、もしかして鳥羽の姪ごさん？ 見学にいらしたのね」

ガーン――

激しいショックが亜衣を襲う。翔哉に姪がいるとは聞いていたが、確か小学生のはず。いくら何でもそれはヒドイ。

「違うって、葉山さん。彼女は俺の新しいアシスタントで、雪原亜衣さん。二十三歳の社会人だよ」

「ええつ、社会人？」

失礼すぎる反応だ。だが、無理もない気もする。この外見に加え、さつきは子供みたいに転んだのを目撃されている。

「ごめんなさいね、雪原さん。真面目に勘違いしてしまったわ」

手を合わせる彼女に亜衣は首を横に振ったが、なんとなく、今の言い方には引つかかるものがあった。

「亜衣ちゃん、こちらは俺の担当編集者で、葉山美夏さん。月刊誌の連載を見てもらってる。俺を担当して五年目かな」

「ええ、来月でちょうど五年目ですね」

「担当……さん」

漫画家にはそれぞれ担当編集者が付くと聞いたことがある。ここは漫画雑誌を発行する出版社で、目の前にいる葉山という女性は編集者。つまり、翔哉は本当に漫画家ということ――

（それも、フロルグループのVIP会員になれるほどの？）

亜衣は漠然とした一流漫画家のイメージを、彼に重ね合わせた。

「分かってくれた？」

翔哉がいたずらっぽく覗き込む。亜衣はこくこくと頷き、あらためて葉山に見向くと、ぺこりと頭を下げた。翔哉の仕事を手伝うのなら、この女性は亜衣にとっても仕事関係者である。

「そう、この方が新しいアシスタントの……」

葉山は亜衣をしげしげと見回してきた。

ずいぶん不躰な視線を感じるけれど、気のせいだろうか。

「葉山さんに会えてよかった。俺が漫画家だって、信じてもらえなくて」

「うふふ、それは仕方ないわ。先生がご本人だと、私だって初めは信じられなかったもの」

亜衣は会話の意味が分からず、二人の間で視線をキョロキョロさせる。

「あのお。しょ……春野さんは、どんな漫画を描かれているのですか？」

おずおずと尋ねると、葉山は驚いた顔になる。

「えっ、ご存じない？」

「は、はい」

葉山はもう一度、亜衣を見回してきた。全身くまなくチェックするような鋭い目つきが、ちょっと怖い。

「先生、どういうことですか？」

散々亜衣を見たあと、葉山の目は翔哉に移る。眉間に皺しわを寄せて、責めるような口調だ。

「えっと、少し事情がありまして。これから仕事場に行つて、彼女にはそこで話すつもり。葉山さんは何も心配しなくていいよ」

「でも、先生のアシスタントが……」

この子に務まるのかしら——

皆まで言わずとも分かった。あからさまに不信感を持つて、こちらを見ている。きっと彼女は亜衣の少女趣味な外見から、頼りないと判断したのだろう。

「それじゃ、もう行きます。亜衣ちゃん、こっちだよ」

翔哉は亜衣の手を取ると、葉山から引き離すようにした。

「あつ、ちょっと先生」

「打ち合わせは明後日だよ。そんな時、マネージャーが報告します」

葉山が呼び止めるのを振り切るように、翔哉はさっさと歩く。またしても転びそうになる亜衣だが、彼の手にしっかりと支えられ、よろけながらも付いていった。

出版社のある神田から代々木まで電車で戻り、駅から六分ほど歩くと十二階建てマンションに着した。翔哉の仕事場は最上階にあるとのこと。

「築七年の4LDK。前に住んでたところが手狭になって、去年引っ越したんだ。ちょうどいいタイミングで部屋が空いてね、知り合いに紹介してもらった」

「デザインがお洒落しゃれだし、立派な建物ですね」

最上階は戸数が少なく、その分床面積が広く取られ、ルーフトバルコニーも付いていると翔哉は説明する。外観ばかりでなく、内もゆったりとした住まいのようだ。

エントランスホールに入る前、亜衣はふと立ち止まった。

よく考えると、ここは翔哉の仕事場だが、自宅でもある。つまり、このまま付いていくと男性の部屋で二人きりになってしまう。いくら彼の職業がちゃんとしたものと判明したとはいえ、男であることに変わりはない。いきなりその状況はマズイのではないか。

「亜衣ちゃん？」

翔哉は振り返り、こちらの様子を見てピンときたようだ。取り出したカードキーをポケットに仕舞うと、亜衣の前に歩み寄る。

反射的に、ビクツと震えてしまった。それに気付いて、彼が苦笑する。
「俺が怖い？」

とっさにプルプルと横に顔を振った。が、少し間を空けてから微かに頷く。

「まあ、そうだよな」

翔哉は腕を伸ばし、亜衣の髪にそっと触れた。優しく、穏やかで、思いやりに溢れた指先に慰められる。今、亜衣が怖いと思っているのは、他でもないこの人のはずなのに——

「あのさ、俺の仕事場にはしょっちゅう人が出入りしてる。マネージャーやアシスタント、さっきの担当さんだってそう。男女関係なく迎え入れてるよ」

翔哉の指が離れ、亜衣はゆっくりと彼の顔を見上げた。

「仕事は仕事。スペースもきっちり分けてあるから、君は仕事場にいればいい」

「はい……」

亜衣は不思議だった。自分は一体、何を恐れていたのだろう——そう考えるくらい、今は安堵の気持ちでいっぱいだ。反対に、離れてしまった翔哉の指を未練がましく目で追い、寂しさを感じるほど。

「それに、皆いきなり来るからね。君を襲いたくてもそんなタイミングないと思うよ」

「えっ？」

爽やかに笑いながら言い、翔哉はカードキーを取り出した。

十二階でエレベーターを降りてホールを出ると、通路が左右に分かれている。

「このフロアに入るのには二戸のみで、右に行くと俺の部屋。お隣さんは海外出張中とかで留守がちなし、静かな環境だよ」

「確かに、静かですね」

亜衣は自分の住む吉祥寺のアパートと比較し、生活レベルの格差を感じてしまう。翔哉は中古で購入しようだが、それでも相当な価格だったのではと推察できる。

翔哉の後に付いていくと、『1101』と彫刻された門扉の前に、一人の男性が立っているのが見えた。

七分かけのヘアスタイルにシルバーフレームの眼鏡、ビジネスコートの下にスーツを着込んだ姿は、堅い職業を連想させる。男性は翔哉に気付くと腕組みを解いた。

「遅いぞ、どこ行ってたんだ」

切れ長の目で、じろりと睨む。

「悪い、ちよつと寄り道した」

翔哉の受け答えから、知り合いであることは分かった。でも、なんだか怖そうな人を感じる。

「時間は守れと言ってるのに……ん？」

翔哉の背後からそつと顔を出した亜衣に、「おや」という表情を浮かべた。細面の神経質そうな顔がフツと柔らかくなり、意外にも優しい印象が変わる。

「やあ、こんにちは。何だ、姪ごさんが来てたのか」

ガガーン——

葉山に続いてのショック。亜衣は顔をひきつらせるが、翔哉はクスクス笑っている。

「桂史、彼女は雪原亜衣さん。この前話した新しいアシスタントさんだよ」

「えっ、本当に？」

この人も、亜衣を小学生と思ひ込んだらしい。葉山と同じ反応に本気でへこみそうになる。が、彼は一瞬で思考を切りかえたらしく、亜衣にきちんと向き直ると、右手を差し出した。

「大変失礼しました。私は春野のマネージャーで小岩桂史と言います。彼とは大学時代からの付き合いで、この仕事は三年目になります。どうぞよろしくお願ひします」

「は、はい。こちらこそ、どうぞよろしくお願ひします！」

にこりと笑う彼はやはり優しい印象で、よく見ると端整な顔立ちをしている。翔哉とはまた違うタイプの美形男子に緊張しつつ、握手した。

「ところで雪原さん」

「はい」

小岩は笑みを収めると、亜衣に質問を向けた。

「念のためお尋ねしますが、成人はされていますね」

大真面目な口調に、思わずずっこける。

「彼女は二十三歳の社会人だよ。この前、ちゃんと話しただよ」

翔哉が横から口を出した。大学時代からの付き合いだという彼らは親しげだが、翔哉は信用されていないのだろうか。

「いや、だから念のためだ。何しろお前の漫画は……」

「とにかく、こんなところで喋っててもしょうがない。寒いし、中に入ろう」

小岩が何か言おうとしたのを、どこか不自然に翔哉が遮った。そして彼は門扉を開け、亜衣の肩を抱くようにし、少し強引に招き入れた。

「おい、翔哉」

「お前は先に入って暖房を付けといて。亜衣ちゃんは俺と一緒にね」

玄関ドアを開くと小岩の背を押しやって中に入れ、ついでのように亜衣と手を繋いだ。あまりにもさり気ない仕事で、ためらう間もない。小岩は気付かず廊下を歩いていく。

「あの、翔哉さん？」

なぜ家の中で手を――

翔哉は亜衣を見下ろすと、片方の手でドアを閉め、鍵をロックした。

胸の鼓動が速くなる。これはときめきではなく、怖い方のドキドキだ。

「約束は憶えてる？」

「え……」

「君は俺の仕事を手伝う。失くしたネックレスの代償として」

亜衣はこくこくと頷く。その約束を守るため、ここまで来たのだ。

「もっ、もちろん憶えています」

翔哉は満足げに微笑むと、握った手に力を込めた。もう逃さないと言わんばかりの強い力。いき

なり手を繋かれ、離れようとしても離れられないこの状況は今朝と同じだ。

「あの、翔哉さんの漫画って、恋愛ものですか？」

亜衣の質問に彼は答えず、廊下の奥へと手を引いた。突き当たりのドアが仕事場の入り口らしく、大きな札がかかっている。

——星ノ宮工房——

「ほしの……みや？」

どこかで聞いたことのある響きのような気もしたが、ピンとこない。

「はい、ここだよ」

翔哉がドアを開けると、そこはまさに漫画の制作現場だった。

部屋の奥中央に、大きな机が据えられている。その手前に並ぶ四台のデスクは、アシスタント用だろう。二つずつ向かい合わせになっている。壁には本や雑誌など資料が詰まった書棚が並び、パソコンやタブレットなどデジタル機材も見られる。コピー機やファックス、応接セットまで揃い、一見オフィスのような環境だが、やはりクリエイティブな空間に感じた。各デスクに置かれた漫画制作用の道具が、その空気を醸しているのかもしれない。

ここでようやく翔哉は亜衣の手を解放した。

自由に見ていいと言われ、亜衣は視線をキョロキョロ動かす。

「すごいですね。ペンとかインクとか……あ、これは何に使う道具ですか？」

楕円形をしたアクリルの板を指差すと、小岩が横に来て説明してくれた。

「雲形定規くもがたしじょうぎといって、曲線を引く道具だよ」

「あ、なるほど。こういうのがあるんですね。うわあ、初めて知りました」

「雪原さん、漫画を描いたことは？」

「漫画ですか？ いいえ……」

小岩の怪訝けげんそうな顔を見て、亜衣は肝心なことに思い至る。漫画家のアシスタントとは、漫画を描く手伝いをする人のこと。これまで漫画は読む専門で、描いたことなど一度もない。そんな自分に一体どんな手伝いができるというのか。

翔哉の方を振り返ると、彼は窓辺にゆっくりと向かい、ブラインドを開けるところだった。雲間から薄日が射し、街と、公園の樹木を照らしている。

「単純作業から徐々に慣らしていくさ。それに、亜衣ちゃんには漫画以外のアシストをメインにしてもらおうと考えていたんだ。その方がお前も助かるだろ」

「まあ、そうだが。しかしまったくの未経験とはね……」

(漫画以外のアシスト？)

困惑する亜衣を、小岩が心配そうに覗き込んできた。彼も翔哉と同じくらい背が高いため、かがまなければ亜衣の目線と合わないのだ。

「旅先でのことは聞いたよ。今時律義な子だなあって感心したけど、仕事の内容を知らずに手伝う

約束をするとは、ちよつと驚きだ」

「は、はあ。すみません」

確かにそのとおり、ちよつと無謀むぼうだったかもしれない。と言うより、そもそも早川達に指摘されていたではないか。

(でも、翔哉さんはそんな怪しい人に見えなかったもの)

要するに、そこだった。彼に対する好意と信頼が、ここまで自分を連れてきたのだ。

超理想的な外見に惹かれたのは確かだが、それだけじゃない。彼の態度は優しく、紳士で、親切だった。危ないところを助けてくれた恩もある。信頼できる人だと思えばこそ、『何でもします』と約束ができたのだ。

小岩は覗き込むのをやめると、亜衣に尋ねる。

「しかし、實際来てくれるとは思わなかった。本当に無報酬でいいのかな」

「それはもちろん。これは償いくぐいのためですから」

「ほう、偉いなあ」

褒められてもじもじする亜衣に、小岩は小さく笑う。やっぱり呆れられたかなと見上げるが、彼は納得顔で頷いてくれた。

「それでは、初仕事。キッチンでコーヒーを淹いれてくれるかな」

「はいっ！」

漫画以外の仕事とは、おそらく雑用だ。小岩はマネージャーとのことだが、細々とした用事も任

されているのだろう。だから、亜衣がアシストに入ること、『お前も助かるだろ』と翔哉は言ったのだ。

仕事場の隣にキッチンがあると教えられ、亜衣は張り切つてその方へ歩いた。漫画の手伝いは自信がないが、雑用ならお手の物だ。会社でも似たようなことをやっている。

「あたっ」

勢いよく歩きすぎて、デスクの角に腿ももをぶつけた。そのはずみに、デスクの上からファイルが落ち、挟はさまっていた紙が散らばった。

「すみませんっ」

早速ドジってしまった。亜衣は慌あわててしゃがみ込むと、床やデスクの下に広がった紙を拾い集める。A3のファイルから零こぼれたのは、漫画の原稿らしきもの。こんな大事なものをと亜衣は焦あせるが、ふと手を止め、その紙を見つめた。

(え、これって……?)

ホテルのベッドルームらしき場所で、男と女が絡み合っている。全裸で、すごい体勢で、セックスしている場面だ。

「ひゃっ」

驚いて一枚めくると、今度はオフィスで抱き合っている。しかも、さっきの女が別の男と――

「ひえええっ」

正視に耐えられず、原稿の束を丸ごと放り投げた。汚いものでも捨てるかのような扱いだが、亜

衣には受け付けられない代物だつた。

「どっ、どうして、こんな漫画が!？」

「雪原さん、それは大事な原稿……」

小岩が近付こうとしたが、翔哉がそれを止めた。彼はつかつかとこちらに歩み寄ると、捨てられたページを拾い上げる。亜衣は嫌悪の目でそれを追った。

「もしやと思ったけど、ここまで拒絶するとはね」

彼はため息まじりで呟く。あからさまにがっかりした態度だ。

「それはまさか、あなたが……?」

この人は春野翔哉。スポーツ少年のように爽やかで、優しく、紳士な男性。こんなエッチな世界とは無縁のはず。絶対あり得ない!

翔哉は床に膝を突くと、放られた原稿をかき集める。端をきれいに揃えてから、タイトルページをこちらに向けて亜衣と視線を合わせた。

「怜文社発行の雑誌『月刊リーベ』にて連載中の『ソルシエール』。ドラマ化の大ヒットで、今かなり注目されている」

『フロル・ネーヴェ』のレストランで、早川達と話題にした。ドラマも原作も女性に大好評の作品で、原作者は……

——あんな漫画を描くくらいだから、とんでもなくエッチな女性なんだ。その上、美人でスタイルがよくて、仕事もできて……

亜衣はそんな女性像を勝手に想像し、一番苦手なタイプだと思っていた。まさか、その人が……「信じられない!」

「そうだね、よく言われる」

「な……」

あっさり認められても、まだ半信半疑だ。だけど、亜衣はふと思いついた。

仕事部屋のドアにかかっていた大きな札に書かれた名称——間違いない、ここがあのエッチな漫画の制作現場だ!

「ダメです。私、こんな仕事手伝えません。絶対無理です!」

「亜衣ちゃん、落ち着こうか」

そんなこと言われても興奮は収まらない。

「ひ、酷いです、こんなの。騙したんですね」

「誰が?」

しれっと返され、亜衣はあ然とする。

「誰がつて……決まってるじゃないですか!」

亜衣の言葉に、翔哉はにつこりと微笑んだ。慌てふためく亜衣を宥めるような、それでいて楽しんでるかのような、嬉しげな表情。

私はこんなに動揺してるのに、どうして余裕たっぷりなの? と、恨めしい気持ちで見返す。その視線を、彼はやんわりと包むようにして受け止める。